

概要報告

実施期日	7月28日(火)【午後】
部会名	小学校 社会部会

テーマ

『共に学ぶ～聴く子考える子表現し伝え合う子～社会的事象を自分事として考える児童を目指して』

提案概要

今回、年間を通して計画的・横断的に子どもたちが自ら考えをもつ取り組みを行ってきた。子どもたちは、6年生から始まった歴史の単元を通して、資料から情報を読み取る力をつけた。その中でも「戦争から平和へ」の単元では、戦争は世の中から人間らしい生活を奪ってしまうことについて、様々な資料や被爆者の方の話などの事実を通して学んだ。学習の中で、戦時中に子どもたちが受けていた教育から、当時の子どもの思いを想像し、「当時の子どもたちは本当に戦争をしたかったのか。」というような意見が出てきた。一人ひとりが自分で得た情報から多面的に物事をとらえることができたように思う。しかし、その時点では、世界の現状にまで目を向けることはできていなかった。

そのため、「平和憲法」を扱う小単元を重点化して大単元を構成した。平和を願う日本人として、世界の国々の人々と、共に生きていくことが大切であることを自覚し、これからの日本を担う自分たちの行動を考えることを目標にし、話し合い活動の充実に努めた。憲法第9条ができた後の、様々な戦争に関する資料を提示し、知識を得た上で個人→グループ→全体→個人の流れの中で、子どもたちがこれからの日本のあり方を自分事として考えられるようにした。また、得た情報から世界の平和の実現のために自分なりに考えようとしているかを、ワークシートへの記載内容で評価した。

今回の実践では、グループで考えを交流する時間をとり、それぞれが様々な考えをもっていることを認め合いながら学習を進めた。子どもたちは進んで平和についての自分の考えを述べ、他児の考えを知ることで自分の考えを深めることができた。一方で、これからの日本を担っていく子どもたちが、自分たちにできることを話し合い、互いの意見を尊重し考えていくためには、憲法への興味・理解を深めた上での話し合い活動が必要だと感じた。それぞれが自分の生活と日本国憲法をつながりのあるものとして捉え、それに対する自分の意見をもてるように、身近な事象を様々な場面で取り上げることが大切だと思う。これらの点については今後の研究課題である。

質疑概要

- ・湾岸戦争時の日本への批判や、集団的自衛権に関する資料の提示はあったのか。
- ・平和学習を進めていくための、本時以前の取組について。
- ・「戦争は必要。」と言う子どもはいたか。そのような発言があった時の他児の反応はどうだったか。
- ・本時の評価について。
- ・物事を多面的にとらえるための手立てについて。

研究協議概要

○研究協議の柱1 「社会的事象を自分と関わりのあることとして、考える力をつけるための取組」について

・低学年のころから様々な社会的事象について話し合っていく必要がある。特に自分の生活と関わりのあること、例えば中学年での地域学習、日直の朝のスピーチなどを使って、話し合う活動を取り入れるとよい。また、話し合い活動では、子どもが自分の考えを明確にするための客観性・公平性を持った資料が大切。

○研究協議の柱2 「子どもたちが互いに認め合いながら考えを伝え合うための取組」について

・クラスの間関係が大切。間違いや反対、大多数の意見に流されない、共感的に話を聞く、などの場づくりの必要がある。そういった人間関係や場づくりが、認め合うことにつながっていくと思う。また、教師が子どもに身につけさせたい力を明確にすることも大切。

まとめ概要

<協議の柱1について>

・歴史学習のように視覚化したくてもできないものがあるので、教材が大事。客観的で多様性のある資料が必要。クラスの実態に応じて、資料をその都度変える必要も出てくる。

<協議の柱2について>

・個→グループ→全体で学んだことを、個に戻すことが大切。伝え合い認め合うためのクラスの安心感は、日々の授業の中で、授業をとおして作り上げていくもの。それが子どもを育てることになり、自己肯定感を育てることにもつながる。教師がクラスの一人ひとりを認めることが、子どもたちの自己肯定感・他者肯定感を育てることになる。ゆさぶりのある課題設定が大切。